

# 予防接種について 《 子宮頸がん予防ワクチン(ヒトパピローマウイルスワクチン) 》

(2022年4月1日現在)

子宮頸がん予防接種は、平成25年4月より、任意予防接種から定期予防接種(法定接種)になりました。

保護者の方(被接種者の方)は、この説明書をよく読んで、接種回数や他の予防接種との接種間隔を守った上で、接種期限内に予防接種協力医療機関において接種を受けるようにしてください。

【定期接種対象者】小学6年生～高校1年生に相当する年齢の女子 (標準的接種期間：中学1年生に相当する年齢の女子)

【キャッチアップ接種対象者】平成9年4月2日～平成18年4月1日生まれで子宮頸がん予防ワクチン未接種の女子

※平成18年4月2日から平成20年4月1日生まれの女子については令和7年3月31日までキャッチアップ接種として予防接種を受けることができます。

## 子宮頸がんについて

子宮頸がんは、発がん性ヒトパピローマウイルス (HPV) というウイルスの持続的な感染が原因で引き起こされる病気です。

HPVは、性交経験がある女性であれば誰もが感染する可能性があり、子宮頸がんの約50～70%は、100種類以上の遺伝子型があるHPVのうち16、18型の感染が原因とされています。HPVに感染しても多くの場合、ウイルスは自然に排除されますが、ごく一部で数年～十数年かけて前がん病変の状態を経て子宮頸がんを発症します。

子宮頸がんは、日本では年間約11,000人が発症し、約2,900人が死亡している疾患であり、女性特有のがんの中では第2位の罹患率となっています。たとえ死に至らなくても、ごく初期のがんを除いては子宮摘出となる可能性があり、その場合は妊娠や出産への影響はもちろん、排尿障害などの後遺症により日常生活に支障をきたすこともあります。

子宮頸がんは、全ての年代の女性が罹患する可能性がありますが、近年20代～40代で急増しているのが特徴です。

## 子宮頸がん予防について

子宮頸がん予防ワクチン接種によって、子宮頸がんを完全に予防できるわけではありません。予防できない子宮頸がんは、検診によって早期発見する必要があります。

子宮頸がんは、ワクチン接種と定期的な検診によって防ぐことができますので、20歳になったら、必ず定期的に子宮頸がん検診を受けましょう。

**\* 予防接種券(裏面：予診票)、母子健康手帳を持参のうえ、金沢市の予防接種協力医療機関で接種してください(要予約)**

## 子宮頸がん予防ワクチンについて

現在、国内で接種できる子宮頸がん予防ワクチンは、2種類あります。

海外の報告では、感染及び前がん病変予防効果に関して、両ワクチンとも高い有効率が示されていますが、HPVに既に感染した方には、有効性が低いことから、初回性交渉前に接種することが推奨されています。

過去に接種歴のある方は、前回接種したHPVワクチンと同一の種類のワクチンを使用してください。ただし、過去に接種したHPVワクチンの種類が不明である場合、接種を実施する医療機関の医師と被接種者とで十分に相談した上で、接種するHPVワクチンの種類を選択してください。

ワクチン名	サーバリックス(2価)	ガーダシル(4価)
予防できるHPVのタイプ	16型、18型 (子宮頸がん高リスク型)	16型、18型 (子宮頸がん高リスク型) 6型、11型 尖圭コンジローマ発生源)
接種回数	3回接種	3回接種
標準的な接種間隔	1回目から1か月後に2回目 1回目から6か月後に3回目 (※1)	1回目から2か月後に2回目 1回目から6か月後に3回目 (※2)

(※1) 上記の接種間隔ができなかった場合は、1回目から1か月以上あけて2回目、1回目から5か月以上かつ2回目から2か月半以上あけて3回目

(※2) 上記の接種間隔ができなかった場合は、1回目から1か月以上あけて2回目、2回目から3か月以上あけて3回目

## 主な副反応について

主な副反応は、発熱や局所反応(疼痛、発赤、腫脹)です。また、ワクチン接種後に注射による痛みや心因性の反応等による湿疹があらわれることがあります。失神による転倒を避けるため、接種後30分程度は体重を預けることのできる背もたれのあるソファに座ることなどして様子を見るようにしてください。

稀に、報告される重い副反応としては、アナフィラキシー様症状(ショック症状、じんましん、呼吸困難など)、ギラン・バレー症候群、血小板減少性紫斑病(紫斑、鼻出血、口腔粘膜の出血等)、急性散在性脳脊髄炎(ADEM)等が報告されています。